

設 立 平成21年5月
資 本 金 700万円
代表取締役 小原 孝也



代表取締役 小原 孝也

事業方針

- 地域農産物の振興
- 農作物の加工及び販売による地域雇用の拡大
- 農業経営の受託による農地の有効活用

事業内容

- 桑葉を活用した独自商品の研究開発と販売促進
- 特産加工品の研究開発と販売促進事業
- 高付加価値農作物の研究開発と販売促進事業
- 生きがいづくり事業
- 健康づくり事業
- 営農支援事業
- 交流・定住促進事業
- 耕作放棄地防止及び活用事業
- 産直施設・農家レストランなどの運営事業



岩手大学 農学部 農学生命課程 学系（応用生命科学系）

農学博士 **鈴木 幸一**

Suzuki Koichi



岩手大学
鈴木 幸一 農学博士

【現在の専門分野】

昆虫生理学、昆虫バイオテクノロジー

【研究題目】

昆虫機能を利用したバイオテクノロジー
(KEYWORD：昆虫、機能、バイオテック)
昆虫の休眠制御機構に関する研究
(KEYWORD：昆虫、休眠、メカニズム)

昭和	44年	3月	岩手大学農学部卒業
	46年	3月	名古屋大学大学院農学研究科修士課程修了
	46年	4月	名古屋大学大学院農学研究科博士課程退学
	46年	5月	岩手大学助手農学部
	60年	10月	岩手大学助教授農学部
平成	2年	8月	文部省在外研究員（アメリカ、アリゾナ大学）
	8年	4月	岩手大学教授農学部（現在に至る）
	10年	4月	（社）日本蚕糸学会・蚕糸学賞受賞
	11年	7月	岩手大学評議員
	12年	4月	岩手大学大学院連合農学研究科代議員
	12年	5月	（社）日本蚕糸学会常任理事（東北支部長・国際交流担当）（現在に至る）
	14年	7月	日本昆虫学会東北支部長（現在に至る）
	15年	4月	放送大学客員教授（非常勤）
	15年	10月	日本学術会議蚕糸学研究会連絡委員会委員
	18年	6月	岩手大学農学部附属寒冷バイオシステム研究センター長 （平成20年4月より寒冷バイオフィロンティア研究センターに名称変更）
	20年	4月	岩手大学地域連携推進センター長（現在に至る）

主要な著書・論文

温度と生命システムの相関学（分担執筆）（2009） 東海大学出版会
耐性の昆虫学（分担執筆）（2008） 東海大学出版会
鈴木幸一ら（2006） 地域とQOL向上のための昆虫バイオテクノロジー、蚕糸・昆虫バイオテック、75：97-102
鈴木幸一ら（1997） 昆虫機能利用学、朝倉書店

Sato, Y. et al. (2010) A palmitoyl conjugate of insect pentapeptide Yamamarin arrests cell proliferation and respiration, *Peptides*, 31: 827-833
Tsushima, M. et al. (2010) Hot-water extract of *Paecilomyces tenuipes* from the silkworm pupae improves D-galactose-induced brain aging in mice, *J. Insect Biotech. Sericol.*, 79: 45-51.
Cui, X. et al. (2009) Isolation and characterization of a 41 kDa sericin from the wild silkworm *Antheraea yamamai*, *J. Insect Biotech. Sericol.*, 78:11-16.
Yang, P. et al. (2008) A novel cytochrome P450 gene (*CYP4G25*) of the silkworm *Antheraea yamamai*: Cloning and expression pattern in pharate first instar larvae in relation to diapause, *J. Insect Physiol.*, 54: 636-643.
Fujita, et al. (2006) A chitinase structurally related to the glycoside hydrolase family 48 is indispensable for the hormonally induced diapause termination in a beetle, *Biochem. Biophys. Res. Commun.*, 345: 502-507.

「思い」の出会い

今から10年ほど前、一人の男が更木の地に降り立つ。遠藤原一郎

氏。宮沢賢治が好きな彼は更木を安住の地と定め、地域にとけ込みながら公民館活動などを始める。

2008年1月、遠藤氏は地元新聞のコラムに釘付けになる。氏の頭にひとつの閃きがあった。お正月気分もそこそこに、岩手大学の研究室のドアを叩いた。鈴木教授との最初の出会いだった。

「桑」の可能性についてレクチャーを受けた遠藤氏は、数日後更木地区の人たち数人と桑製品の発表会に参加する。そこで、皆が手応えのようなものを感じた。

元々養蚕が盛んだった更木地区。「桑」を受け入れるのは、自然なことだった。すぐに、「更木桑資源研究会」を立ち上げると、わずかに残っている桑園の所有者から桑の葉を譲り受け、大東町の振興局事務局長の協力の下、陸前高田市にある気仙茶製作所で「更木桑茶」の試作品を作る。その感想は上々で、「桑」の可能性への手応えは確信に変わった。



遠藤 原一郎 常務取締役



地域の人々と企業の後押し

しかし、実際にこれを商品化しようとする、運営や設備に資金が必要になる。「これはイケる！」と確信は持つてはいたものの、実際にどうなるのかわからないものに多額の投資をすることには二の足を踏んだ。

このときに決断を促したものが、鈴木教授と更木地区の人たちだった。鈴木教授は、自身のネットワークを用いて桑の葉茶では定評のあるトヨタマ健康食品株式会社に繋いでくれた。そこから機材を借り受けることが出来、業務提携を行うことになった。

また、更木地区の有志45人が出資を行い、750万円の資金が集まった。「桑」に賭けてみようという強い思いがあった。さらに、農業共同組合も使われていない米倉庫を開放してくれた。このような様々な思いによって、(株)更木ふるさと興社が誕生したのである。



桑茶製造機群



異世界の戸惑いと期待の狭間で



遠藤氏は、元々家具のデザイナーだった。農業の経験も起業の経験もない。したがって、全てが初めての体験で、手探りだったという。様々な材料を組み合わせたり成形して出来上がる家具と、育て上げて形にする農作物とは、世界が大きくかけ離れていたのだ。

しかし、地域の人たちの反応や期待が氏を突き動かす。以前、地域活動で公園の整備などをやっていた頃の反応とは明らかに違ったのだ。やりがいを見つけ目を輝かせる人たち。進んでイベントを行おうという声まで上がった。「桑」を更木の特産にするという大きな目標に向かって、地域の人たちが団結し出したのだ。「桑」は、更木地区を誇りと自信に溢れた地域に変えていた。

更木が岩手を、岩手が日本を救う

「桑」の持つ可能性

「桑」は、その昔から不老長寿の妙薬とされてきた。しかしながら、生糸の輸出が盛んだった頃には、そういった点は忘れ去られていた。なぜ不老長寿の薬なのかは、今解き明かされるタイミングだったのかもしれない。糖尿病や動脈硬化の予防やアンチエイジング、免疫力の向上物質など現代が必要としているものを桑は持っている。治療ではなく、予防の見地から桑の持つ可能性や期待は大きい。

高齢化が進む日本。医療費も増え続ける一方だ。もう一方で、少子化も進み労働力も不足してくる。労働力どころか人口そのものが減ってくるのだから、危機的状況と言っていだらう。その中で桑食文化を定着させれば、健康で長生きできるのだ。医食同源という言葉のとおり、私たちは日々の食べ物に気をつけることによって、より良い人生を歩むことができる。桑の秘めたるパワーは、繰り返すが驚きの可能性を持っている。



収穫作業

文化創造

鈴木教授の将来像と(株)更木ふるさと興社の思いはいっしょだ。鈴木教授曰く、「日本の医療費の問題、地球温暖化の問題、雇用の問題、これらを解決するカギを『桑』は持っています。『桑』が当り前に食べられる『桑食文化』を定着させることによって、日本を変えることが出来るのです。」さらに、遠藤氏は「私が鈴木先生に共感したのは、文化を創っていくという点。単なる金儲けではなく、地域を活性化し、ひとつの文化を創るという大きな使命があるから、この事業を進める意義があるのです。」と話す。

今、岩手では更木地区から始まった桑産業が県内全域に広がろうとしている。自然豊かな岩手こそ、この産業は向いていると言えるだろう。鈴木教授には東北を「桑ベルト地帯」にしたいという構想もあるようだ。

二人の人間の思いを、何気なく見過ごしてしまいそうな新聞の記事が結びつけた。叩かれたドアは小さかったかもしれないが、開けられた部屋は壮大だったようだ。今、その一歩が刻まれたにすぎない。

